

日本演劇学会分科会・西洋比較演劇研究会

2023 年度総会・第 228 回例会

2023 年 04 月 15 日（土），於成城大学

14：00－17：00

3 号館 1F: 312 教室

* 対面＋オンライン開催

総会：14:00-14:40 例会：15:00-17:00

総会：会員状況・活動報告・会計報告・活動計画・予算など

例会：パネルディスカッション「演劇は翻訳されたがっている」

パネリスト：小菅隼人（司会），平川大作，新沼智之

趣旨

古代ギリシャ演劇から，シェイクスピア，近代演劇，現代演劇まで，多くの戯曲が翻訳され，上演され，享受されてきたという事実は，演劇が，それが韻文劇であっても散文劇であっても，翻訳可能であり，翻訳されることを欲していると言えるのではないか。戯曲は，「翻訳可能性」と「翻訳志向性」をもっていることを前提に，演劇の翻訳者は，何を翻訳するか？ 何を付け加えて何を失うのか？ どのような翻訳を目指すのか？ という問題をこのパネルでは考える。

第一の課題：戯曲の翻訳は，情報としての意味の伝達の他に，「詩的なもの」としての文学的価値をも伝えるべきか？ 言い換えれば，演劇の翻訳は，①語学的に正確で分かりやすい文章であることと，②俳優に暗記され舞台の上で朗唱される目的を持っているセリフであることの間であって，その二つがせめぎ合う場合，どちらをとるべきか？ もとより劇文学としての「翻訳戯曲」と「上演台本」は，異なる目的を持っており，それ故に，異なる性質を持っているが，翻訳戯曲は，テキストの語学的変換であるだけで十分に目的を達していると言えるのか？ それとも，「詩的なもの」を伝えるための「創造的誤訳」は許容されるのだろうか？ 他方，翻訳上演台本においては，上演のための「創造的誤訳」はどこまで許されるのだろうか？

第二の課題：翻訳劇は，それが戯曲である限り，俳優の身体性が籠められた日本語という意味での「戯曲語」で訳される。そして，「戯曲語」は，現代の読者にもっとも分かりやすい現代日本語であるべきなのか？ すなわち，翻訳劇は，常に，現代日本語の中での「新訳」であるべきなのか？ あるいは，いわゆる翻訳であることを意識させない「創造的翻訳」は翻訳劇としての価値があるだろうか？ 例えば，シェイクスピアの場合，坪内逍遙訳や木下順二訳，福田恆存訳などの文学者の翻訳が，新訳に超えられることのない，翻訳戯曲として

の価値があり得るのだろうか。それとも、折口信夫が、上田敏の『海潮音』を評して言ったように、あまりにも日本語になり過ぎた翻訳は、外国演劇、あるいは西洋古典劇の翻訳劇としての価値を損なっていないか？

パネリスト・プロフィールと主な翻訳戯曲

● 小菅隼人（慶應義塾大学・教授）

・研究分野：シェイクスピアを中心とする英国チューダ朝演劇研究，土方巽アーカイブを拠点とした暗黒舞踏研究。

・論文等（最近のもの）：「〈時〉に翻弄されたひとたち：西脇順三郎訳『シェイクスピア・ソネット詩集』について」『慶應義塾大学アート・センターBooklet：30号』2023年3月。「〈自然〉の中の人間，人間の中の〈自然〉シェイクスピア作『リア王』（William Shakespeare, The Tragedy of King Lear）の空間意識—試論」『慶應義塾大学教養研究センター：接続』No.1, 2023年5月（近刊）。

・翻訳：『ハムレット』『新訂ベスト・プレイズ』所収，論創社，2000。『リア王』『ベスト・プレイズII』所収，論創社，2019。

● 平川大作（大手前大学：教授）

・研究分野：英米現代演劇

・論文：「「記憶の演劇」試論—コペンハーゲン」と『父と暮せば』を中心に」（特集 演劇と記憶）『演劇学論集』（通号 42）2004。「「中の人」論—サブカルチャーにおえる演技のその受容」『演劇学論叢』（第 22 号）2023。

・翻訳：マイケル・フレイン『コペンハーゲン』（上演台本，2001年），ブライオニー・レイヴァリー『凍える』（上演台本，2022年）。

● 新沼智之（玉川大学：准教授）

・研究分野：西洋演劇の近代化プロセスについて

・論文等：「演技の近代化プロセスにおけるゲーテの演技観」（『西洋比較演劇研究』Vol.18, No.1, 2019），研究ノート「芝居を見るところということと芝居について語るということ」（『芸術研究』13号，玉川大学芸術学部，2022）。

・翻訳：シラー『オルレアンの乙女』『ベスト・プレイズII』所収，論創社，2019。

資料

1. ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の課題」

しかし、文学作品はいったい何を〈語る〉か？ 何を伝達するのか？ それはそれを理解するひとには、きわめて僅かなことしか語らない。その本質的なものは、伝達でもなく、発言でもない。にもかかわらず媒介者たろうとするような翻訳は、伝達をしか、——非本質的

なものをしか——媒介できはしない。たしかに、このことが悪い翻訳の標識でもある。だが、伝達とは別に文学作品に内在するもの——そしてそれこそ本質的なものだと、悪い翻訳者でさえが認めるもの——は、捉えがたいもの、秘密めいたもの、「詩的なもの」である、と見なされるのが通例だろう。そしてそれを翻訳者が再現できるのは、翻訳者が同時に創作者でもある場合に限られる、と見なされることもまた通例だろう。ここからは実際に、悪い翻訳の第二の標識が引き出される。つまりここから、悪い翻訳は非本質的な内容を不正確に再伝達する、と定義できるのだ。翻訳が読者に奉仕することを自己の義務とする限り、この事態は変わらない。しかし、翻訳を読者のためのものと想定するのならば、原作をもそのように想定せねばならなくなるのではなかろうか。原作が読者のために存在するものではないのなら、それならこの点からは、翻訳はどのようなものとして理解されることになるだろうか？…（中略）

翻訳者の課題は、翻訳言語の中に原作のこだまを呼びさまそうとする志向を、その言語への志向と重ねるところにある。この点に、創作とはまるで違う翻訳の特徴がある。なぜなら創作の志向は、けっして言語そのものに、その総体性に向かうものではなくて、もっぱら言語内容の特定の関連へ直接むかうものなのだから。翻訳はしかし、文学作品がいわば言語の内部の山林自体の中にあるのとは異なり、その山林の外側に位置して、その山林と対峙している。そして山林に足を踏み入れることなしに、自身の言語のなかのこだまが他言語の作品のこだまとそのつど重なってゆけるような唯一無二の場所を見いだし、その場所において翻訳は原作を呼び込むのである。（下線は小菅）（70；82）

* 出典：ヴァルター・ベンヤミン、野村修訳「翻訳者の課題」『暴力批判論他十篇』所収、岩波文庫、1994。

2. 塚本虎二「聖書改訳の意義」

古典は不断の改訳を必要とすると言われる。聖書も一種の古典であるから、絶えず改訳される必要がある。むしろ他の古典に勝ってその必要があると言い得る。普通に古典が改訳を必要とする主な理由は、訳文が時代の変遷で難解になったり不適當になることと、その古典に関する研究の進歩とであるが、聖書においてはそれが一層烈しいのである。聖書は古典でありながら、最も現代的でなければならない。古典として賞翫されるべきでなく、生きた時代の人々の生きた読み物でなければならない。ことに一般人に愛読されねばならないので、聖書ほど最新の現代語訳を必要とするものはあり得ない。また原典研究の点から見ても、如何なる古典も聖書学ほど日進月歩のものはない。例えばその正文は毎年のように改訂の必要が生まれる——一九五〇年に二十版を出したネストレ校訂本は、本年末二十一版が出るそうである。原語、文法の研究、解釈の進歩も、毎年毎年驚くべき数の註解書と、辞書、文典等が出版されることによって察することができる。もしこれらの進歩研究に応じようとするならば、ほとんど毎年聖書改訳の必要があろう。

ところが不思議なことに、改訳を喜ばない強い反対の傾向がある。これを私たちはカトリック精神という。新しい訳は威厳がないとか、だらだらしているとかいう紋切形の非難は、

結局信仰を伝統的な型の中に眠らせておこうとする教会精神である。そしてこの精神が、例えば「凡て人に為られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ」という耳に心地よく、しかし内容的に迫力の乏しい言い方を好み、「何でも人にしてもらいたいように、人にもしてやれ」というような直接的な言い方を好まないのである。(下線は小菅)

* 出典：塚本虎二「聖書改訳の意義」『塚本虎二著作集続第5巻：続々宗教と人生他三篇』所収，聖書知識社，1985.

3. 折口信夫「詩語としての日本語」

「海潮音」に示された上田敏さんの外国詩に対する理会^{ママ}と、日本的な表現力は、多くの象徴詩などをすつかり日本の詩にしてしまった。

流れの岸の一もとは
み空の色のみづあさぎ
波ことごとくくちづけし
波ことごとく忘れゆく

[小菅注：ウィルヘルム・アレント「わすれなぐさ」]

われ人と共に、すぐれた訳詩だと賞讃したものであるが、翻訳技術の巧みな事は勿論だが、其所には原詩の色も香も、すつかり日本化せられて残った憾^{ウラ}みが深い。詩の語の持つてゐる国境性を、完全に理会させながら、原詩の意義を会得する事を以てわれわれは足るとしなればならぬ。翻訳せられる対象は、勿論文学であるけれど、翻訳技術は文学である必要はない。翻訳文そのものが文学になる先に、原作の語学的理会と、その国語の個性的な陰翳を没却するものであってはならない。上田敏さんの技術は感服に堪へぬが、文学を翻訳して、文学を生み出した所に問題がある。われわれは外国詩を理会するための翻訳は別として、今の場合日本の詩の新しい発想法を発見するために、新しい文体を築く手段として、さうした完全な翻訳文の多くを得て、それらの模型によって多くの詩を作り、その結果新しい詩を築いて行くという事を考へてゐるのである。(注：踊り字記号はひらいた、下線は小菅)

* 出典：折口信夫「詩語としての日本語」『折口信夫全集12』所収，中央公論社，1996.